
とある少年の転生人生（アンノウンライフ）

蒼井水晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある少年の転生人生アンノウンライフ

【NZコード】

N1969X

【作者名】

蒼井水晶

【あらすじ】

何故か殺された（泣けてくるね）

とある少年があれ？ 真っ白？

何この世界？ あんた神様？ 超能力くれる？

転生！？なんと「とある魔術の禁書目録」の世界！？

もらった能力は白ひげ+エース+クロゴダイル+…！？

チート？あ、そうでもない。

さあ、原作ブレイクだ！！

僕に出来るか分からぬけど。

(気弱だな僕)

プロローグ（前書き）

小説家志望の学生です。このよつな場所に投稿するのは初めてです。
どうかご教授よろしくお願いします。
ご都合主義、常識無視などは目を瞑つていただけるとうれしいです。

プロローグ

プロローグ

「ピリリリリリリリリ！」

「あーもー、うるさいですねー。」

ガチャン！

僕は、文句を言いつつ、目覚ましを止めた。

いつも毎日やっているマンネリな作業。朝起きて、歯を磨き、食事を食べ、制服に着替え、高校に行く毎日。

面白くもない、ただレールの上を走っているような虚脱感。

「よお、優一！元気か！」

やかましい友人の声で、そんな憂鬱な思考から解放される。

「いいえ、元気じゃありません」

「おいおい、何時に寝たんだ？」

「たしか9時頃だったと思います」

「起きたのは？」

「7時だつたかと」

「10時間も寝てんじゃねえか！十分だろ！」

「いいえ、まだまだ寝足りません」

「さすが、あだ名がねぼすけだけあるな」

「そのあだ名、あまり好きではないのですが……」

僕の名前は七城優一

知り合いの女子曰く、阿良々木暦（某有名作品の主人公）の髪を短くしたような容姿だそうだが。

これと言つて特徴がない、ただの一般高校生だ。

あ、家族には、病氣で体が動かない妹がいる。その介護が面倒で家出した、父親失格の男がいた以外には。それを除けば、ただの一般高校生だ。

「おい。七城、七城！」

おつと、いつの間にか学校に着いていたようだ。

「これは～これで～こうあるからして～」

めんどくさい授業を聞き流し、昼休みも食事をする以外は寝て、また授業を聞き流し。

「ただいま」

「お帰り、お兄ちゃん！」

体が動かなく、僕よりはるかに辛いのに、花が咲いたような笑顔を見せてくれる妹には、いつも元気づけられてばかりだ。

家に帰つて、妹とのおしゃべりを楽しむ。これが、昔からの僕の趣味だ。

そんな毎日を過ごしながら、日常が続いて行く。

高校は面倒だし、何もせず、男と遊び歩いている母親には、心底うんざりだが、佳織^{かおり}の笑顔が見られるのなら、こんな生活も悪くない。

そんな生活に終わりが訪れたのはちょうど一ヶ月後だった。

母親は仕事しないし、佳織に金を稼げるわけがない。僕が働いて家計を支えるしかない。

学校や、国から特別奨学金が出ており、学校のお金は心配ないが、生活資金をバイトだけで稼ぐのは並大抵のことではない。

体力も限界に近づいていた。そんな中、世間を騒がせている連續殺人犯が、僕たちの住んでいる街へ移動してきたとの噂が広がっている。

学校での措置として、原則部活、バイト禁止、午前授業で帰宅。しかし僕はそうもいかない。バイトしなけりや、兄妹二人食えなくなってしまうのだから。

僕は三つのバイトを掛け持ちしている。最後のスーパーのレジ打ちのバイトが終わつたのが、夜の10時頃だった。例の連續殺人犯がよく活動する時間らしい。僕は漠然とした不安を抱きながら少しでも早く家に帰ろうと細く曲がりくねつた裏路地を駆け抜けていく。

「坊主、夜に一人歩きは危ないってママに教わらなかつたのか…」

「へへへへ」

「…。うん。僕は呪われているらしい。泣けるね。

「あいにく僕の母親は、男と遊び歩いてるんでね。母親にそんなことおそわつてないですな。」

「そうか、それは残念だつたな！」

それと同時にめちゃくちゃでっかいナイフを突き出してきた。僕は横に転がつてなんとか避ける。

「へへつ、なかなかいい体さばきじやねえか

「そりや、どうも！」

しゃべりながら、右の拳を振り抜く！ 狙いは顎！
ビュンッ！

バシイツ！

「おしかつたなア」

ものの見事に防がれてしまつた。場慣れしてやがる…。

「悪いな。死んでくれ」

奴はそう言いながら、大上段に構えたナイフを振り下ろしていく一
避けられない！

ブシャアツ！

「ぐはつ！」

右目を縦に切り裂かれた。血が噴き出す。見えないわけではないが

…。

「考え方してる余裕があんのか？」

「しまつた！！

僕の悪い癖だ！！

「終わりだ。悪いな

ドスツ……！」

その音と共に左胸に焼きこじででも当たられたような痛みが走ると同時に意識がだんだんと遠のいていく。

ああ、もう少し生きて……いた……か……た。

佳織……、先……に……逝く……兄……さんを……許してくれ……。

「奴だ！逮捕しろ！」

「君！大丈夫か！」

「救急車！」

「本当にそれでお主はここののかのう？」

最後にお爺さんのような口調の姉が聞こえ、僕は意識を手放した。

プロローグ（後書き）

えらいシリアルになってしまった。いじめでシリアルにする気はなかつたのですが…。

駄文です。

感想、ご指摘などしちゃだれ。

荒らしあは「遠慮願います。

登場人物紹介（前書き）

今回は本編ではなく、オリキャラの紹介とさせていただきます。
+ 中一病注意！！

登場人物紹介

名前 七城優一
ななしろゆういち

学園都市レベル5第一位
マグニチコード

能力名 世界滅亡。震動能力のレベル5。

容姿 阿良々木暦のような顔つき。右目を縦に走る大きな傷がある。「禁じ手」を使うときに右目が開く。いつもこの傷を前髪で隠している。殺されたときの名残。

身長 168?

性格 落ち着いているが、キレると怖い。戦闘狂?

一人称 僕。

二人称 あなた、君。

口調 基本的に丁寧な言い回し。
です～××でしょうか?など。
キレると口調があらつぽくなる。

能力の解説 白ひげと同じように大気を殴りつけ地震を起こせる。さらに拳や脚に衝撃を纏わせる事が可能。大気を碎いて直接震動させ、相手を直接攻撃したり、物理攻撃を防ぐことが可能。

震動と衝撃、どちらも操ることが出来る。

加えて、粒子を高速で震動させることにより、体中から荷電粒子砲を放てる。

空気中の水素に衝撃を当て、強制的に核融合を起こせる。

さらに同じ原理で酸素に衝撃を当て、発火させメラメラの実の真似事が可能。

また、震動を手や脚に纏わせ高周波ブレードを作り出すことが出来る。

さらに、砂を震動させ、刃にしたり、地面を陥没させ、流砂を起すことができる。

衝撃を足などから放出し、瞬間移動ができる。
大気を掴み動かすことができる。

その他の技 神から与えられた、超古代文明の兵器（神様曰くプレゼント）剣術、体術なども使いこなせる。よつて、超能力が使えないときでも十分に戦える。

備考 広域破壊能力ならば一方通行ケンカを凌ぐ。まさに、世界を滅ぼす能力を持つ少年。

一方通行と唯一対等に戦闘ケンカが出来る人間。原作のキャラ何人かにフラグを立てる。妹大好き人間。

名前 七城佳織ななしるかおり

主人公の妹。生まれつき体の四肢が動かない難病を抱えている。しかし、笑顔を絶やさない、優しく、明るい性格。

容姿 異常と言つても良いほど絹旗最愛に似ている。ただし、髪が腰までのロング。髪の色は桃色。

かみさま
神様

真っ白い空間に浮いている、人なりざる者。言い換えるならば、「世界そのもの」しかし、自称「文庫化、二次創作」の神様で、かなりはつちやけた性格。

七城佳織を助けるのと引き換えに、主人公を「とある魔術の禁書目録」の世界に送り込んだ。

容姿 サンタさん。

ダーカナイト
闇騎士

主人公に、戦い方を叩き込んだ人物（本当に人か？）。主人公の能力を鍛え、技を開発させた。神様曰く「正義の心に目覚めた悪魔」だそうだ。

容姿 「デビルメイクライ」のスパーダ。しかし、人間態の容姿。リベリオンと呼ばれる大剣を優一に与えた。

技は個別に説明する場を設ける予定です。

登場人物紹介（後書き）

この時機に不謹慎な気もしますが、一方通行に勝てそうな能力つて、これしかありませんでした。

東北の皆さん、がんばってください。日本中が応援しています。
スパークの人間状態の容姿つて、何かに載っていたはず。

皆さん、検索してみてください。

だれが死んでる？（前書き）

神様がめちゃくちゃはつらつたる（はず）ので、氣をつかなさ
い。

ここにはー!?

「う……、僕は死んだのか
気づいて、顔を上げてみるとそこには、真っ白な世界だった。ん? 真
っ白な世界?

「どこだそりゃ——————!」

つて、叫んでしまった。それはそうだ。顔あげたら水平線すべて真
っ白だったのだから。

「僕は、死んだんだよな

「そうじや

「うおつ! 誰だんた!」

「神様じや

えーと、頭の痛い人が出て来たのかな? でも確かに僕は死んだはず。
「そうじや、お主は死んだ。心臓を一突きにされてな」
地の文を読んだ!? まあいいや。

「つまり、ここは天国?」

「少し違うが、まあ、そのようなものじや」

「ちなみに、あんた、何の神様ですか?」

「文庫化、一次創作の神様じや

「んな神様どこにいるんだ——————!」

はあ、はあ、はあ、ちょっと喋つただけで疲れたよ…。

「で、何で僕をここに?」

「お主の思念が、かなり、といふか、近年まれに見る多さで残つて
いたので。こちらに魂を召し上げたのじや

「はあ、なるほど」

何故、この世に未練があつたのか。それは自分で考えずとも分かる。
妹の佳織のことだ。難病を抱え、一人では生活どころか、ベットか
ら動くことも出来ない。そんな子を残して逝つたのだ。
僕じゃなくても、未練が残るはずだ。

「自分で分かつてているようじゃな」

「ええ…、お願いします！僕を甦らせてください！」

「不可能じゃ」

「何故ですか！」

「お主は死んだ。」

来ん。そういう神の決まりなのじやー

そんな、いや、誰があの子を

۱۷۳

「じゃが、このままでは、お主の残された妹があまりに不憫だ。妹

は儂が面倒を見てやる」

「そんなことが出来るのか!?」

「儂は神じや。それぐらい簡単だ。しかし、無料と言うわけにはい

等価交換と言う奴じや

「何をすればいい

「『』とある魔術の禁書目録』は知つておる？」

「はー。有名なフノベですので、

「そのキャラの一人、アレイスター・クロウリーはな、神になろう

としているのだ。それはならぬ。人一人は神には成れぬ」

「何故ですか？」

「神というのは、人の子の大いなる善行、大いなる善の心があつて

アレイスター・ウッドリーはそれを破壊していく

よく分からん。神の主義の上のはものか?

「アーニーの件はどうが？」

計画は頑坐する。
いや遅い。お母ちゃんが死んで因縁が入り切る。

「ああ、彼女がいたんだ。それで彼女の手を数えてみた。

「殺さねばならぬのは、学園都市第一位の男、垣根てええええい

とくにうるさいんだ

「誰だそりや！－なんだその愉快な名前！」

「冗談はさておき、奴が使う力は、未元物質^{ダーカマター}。この世の物ではない物質を扱う。それすなわち、神に通じる。奴は消さねばならぬ」

「……。分かつた」

「お主が得る能力は白ひげ、エース、クロコダイル、その他、攻撃能力だ」

「白ひげってワンピースの！？」

「ああ、そうじや」

「お主は、レベル5の一方通行も倒せる可能性のある震動能力者として認定される。能力名は世界滅亡^{マグニチュード}。第一位じや。すなわち、垣根を殺害する。その前にお主が殺されてしまつては元も子もないでの。本当は訓練しなければならぬのだがはつきり言つてめんどくさい。よつて技のデータを直接お主の脳に転送する。闇騎士^{ダークナイト}！」めちゃくちゃな事言つてやがる。

「闇騎士とは？」

見るからに怪しい名前なんですけど。

「儂の盟友じや。そう、呼ぶならば、『正義の心に目覚めた悪魔』とでも、呼ばうかの『大丈夫なのか那人。』

「呼んだか？」

「うわ、神様にため口聞いてるよー」

「凄い人だったのか！」

「うむ、こやつに例のデータを送り込んで欲しいのじや」

「了解した」

その言葉と共に闇騎士さんは、こちらを見、僕の頭に手を置いた。

「少し苦しいぞ。頑張れ」

手を頭に置くと同時に、凄まじいとしか形容出来ない量の膨大な情報が入つて来た。

「ぐあああー！」

頭が割れるように痛い。

何か僕ここ最近叫んでばかりだなあ。

「お主の住居は用意してある。まあ、その前に、垣根を殺しに行つてこい」

んな無責任な！！

「お前の妹のことは、心配するな。俺がしつかり面倒見てやる。これでも子持ちなんでな。俺は魔王を殺した男だ。俺を殺せる者は人間界にはいない。頑張つてこいよ」

何か最後に超力ミングアウト來た――――！

僕は驚愕と共に、また意識を失つた。

△だいじめーー? (後書き)

垣根ファンの皆さん、『めんなさー』(ドゲザ)。いつしなければ、話が続かないで…。何か序列を下げるのも嫌だったので、神の定義は僕の希望です。あくまで僕の意見なので、気になさらないでください。

感想、ご指摘、ごしおりください。

圧倒的な力……（前書き）

主人公がチートじみています&垣根が雑魚にしか見えません。

垣根ファンの方々ご注意ください。

戦闘描写はこちらの都合で、視点がはつきりしませんが、ご容赦ください。

圧倒的な力……

結論から言おう。

僕が神からもらつた力は、圧倒的だった。

いや、圧倒的と言つても足りないかもしれない。

それほど、僕の力は大きすぎた。

自然現象を起こせる、もしくは操る。

その力の前では、ありえない現象だろうが、この世に存在しない物質であろうが、無力だった。

その証拠に、第二位は今、僕の足下に死体となつて倒れている。

その表現には、少し、といふか、かなり語弊があるかもしれない。

なぜなら、僕の足下には粉碎状ペーストにされた肉塊があるだけなのだから。

たかが肉塊、されど肉塊。

学園都市のレベル5といえば軍隊を相手取つても勝てると評判の人間だ。

その中でも、頂点。

二枚看板の垣根帝督を一方的に粉碎できるほどの力を僕は手にした。この力を僕は自由に使える。

この世界をぶつ壊そうが、上条に変わる英雄ヒーローにならうが、一方通行アクセラレータを倒して名実共に頂点に立とうが何でも出来る。

でも、僕はこの力を何かを、大切な誰かを守るために使いたい。もうあの子には会えないけれど。あの子の事は忘れないけれど。でも僕は、大切な誰かを自分の全てをかけて守りたい。

もう一人、人の命を奪つてしまつたけれど。

もし、その大切な誰かの命が明日までなら、僕の命も明日までいい。

でも、生きようと叫うなら、地獄まで着いて来てと言つなら、僕はそれに付いて行くだろ？

彼がここまで覚悟を決めるに至ったのを見るには少し時間を遡らなければならぬ。

「うわっ！――

起きたらそこは見たこともない天井とベットだった。
「どーだ！？」

つて、僕は転生したんじゃないか。

状況を整理しよう。

僕は、『ある魔術の禁書目録』^{インテックス}の世界に転生した。
僕は、震動能力のレベル5である。

僕は、どうやらすでに、レベル5の認定を受けているらしい。（神様の口ぶりから）

僕の頭の中には、技のデータが入っているらしい。ちょっと、頭の引き出しを開けてみよう。

（ただいま主人公は技の脳内確認をしております。しばらくお待ちください）

「ははーん、なるほど。ていうかさあ、普通の技でも地震起きたってヤバすぎない？」

どんな能力だよそれ。

白ひげって恐ろしい男だったんだな……。

（ただいま白ひげの恐怖について回想中……。しばらくお待ちください）

「こわっ！――

まあ、垣根を殺せとかなんとかめちゃくちゃ言つてた神様でも、神様は神様、ちゃんと仕事はしてくれたらしい。
よく分からん能力の検査とかも受けないで済んだことだし、少しゆっくりしますか。

珍しく、僕にしては不安も何も感じず、それから一週間は確実に「ごろごろ、だらだらして過ごした。

料理はまあ出来るし、（レパートリーが少ないのが残念だが）冷蔵庫には、一週間分以上の食料が入っていた。

神様の心付けてやつだろ！

でも、ずっとじるじるしてくるのもどうかと思つて、家の近くの河原ををジョギングしていた時だった。

いかにも不良^{ワル}ですって風情の皆さんがたむろりてこらへしゃつた。

しかも絡まれた。セリフは「金だせよ」とありきたりだったのを追記しておく。

「いやです。どつか行つてください」

「おー、やめとけ、駒場！」この時はヤバい…

『^{アースクエイクショウ}地震解放！』

ワンピースの白ひげと同じ構えをして大気を殴りつけ、その衝撃力で攻撃。

えへ、不良達はどうかにぶつ飛んでいました。

ちなみに、不良の一人は浜面だったが、優一は忘れていた。原作を少しだけ変えてしまつていた。

それを見ていたのは垣根帝督だった。

「おー、テメエが新しくレベル5に認定された野郎だな」

おお、こいつが垣根帝督！狙っていた相手があちらから来てくれるとは偶然つてありがたいものですね。

「俺はテメエが気に入らねえ。死ね！」

マジですか？理由が「気に入らねえ」だけ上から田線なんだこの野郎。

「食らいやがれ！」

その台詞と共に伸ばされて来た未元物質の翼は、僕のわずか数センチ手前で停止した。

『無駄遣い』
『リミテッド・アタック』

「与えられた衝撃を基に、能力者に危険が及ぶと判断された無意識下の演算により、自分に与えられた衝撃に対し、反対方向から力を加えることで、攻撃を無効化する技。

この技で、未元物質は全て無効化した。

「厄介な能力だな、本当によ」

「お褒めの言葉をどうも！」

その言葉に皮肉で返し、僕は技を発動させる。

「消えた！？」

『イノセント・ゼロ』

『縮地』

足から衝撃を放出し、瞬間移動をする技。

これで、垣根の懷に入った。

『ファストアタック』

『瞬撃』

縮地で相手の懷に入り込み炎を纏つた拳と掌打で攻撃する。

ドドードドン！

人と人がぶつかつたような音ではなく、まるで戦車の砲撃のような轟音が空に轟いた。

「あぶねえ、てめえ、能力を完全にモノにしてやがるな」

垣根はその翼で、炎の拳を防いでいた。
僕はまた、距離をとる。

「まあね」

サラサラツー

「おいおい、なんだよそりゃあ…」

そう、いまの僕の左腕は、例えるならばワンピースの赤犬大将の技、

『大噴火』を模した形をしていると言つべきか。

その巨大な拳は砂で出来ているが。

「粒子震動を利用して砂を制御しているのがークソやウツー。」「貴方はこの膨大な質量を受けれますか?」

覚悟しやがれ。

『砂丘の月』
デザート・リュヌ

ゴオッ!!

その巨大な砂の拳は、確かに垣根帝督をとらえたはずだったが、そう簡単にはいかなかつたらしい。

「つぐう!」

『SIDE：垣根』

確かに、奴に打ち込まれた砂の拳は効いた。もう左腕は使いもんにならねえ。

だが、俺の未元物質に常識は通用しねえ。絶対殺してやる。第一位に、喧嘩売られたこと覚悟しやがれ。

『SIDE：優一』

砂丘の月で死ななかつたか。

でも、左腕は折れた。これで戦力は半減だ。

「行くぜ!」

と、垣根はまた翼を伸ばしてきた。

「え?」

当たり前だ。今僕自身がどこに居るのか把握していない。

『伝説の傭兵』
ステルス

微弱に空気中の粒子を震動をせることで、光を屈折させ敵に認知されなくなる技。

よし、垣根の真後ろだな……。

『砂丘の金剛宝刀』
デザート・ラスベーダ

砂を震動させ複数の刃を作り、敵に放つ技。クロコダイルのやつ。

「! ! ! ! !」

ばつたりと背中から生やした翼が斬れた。

「クソ野郎が！」

今のうちに攻撃を連発。

『ストライク・ショック』『衝撃収束』『フック』

白ひげがワンピースでやつていたように、手や脚に衝撃を纏わせ、直接地震の衝撃力を見舞う。

「ぐああっ！」

垣根はピンポン球のように跳ねて転がる。

追撃！

『ストライク・ショック』『衝撃収束』『パワーレッグクローキング』

衝撃収束の状態で放つミドルキック。

『ストライク・ショック』『衝撃収束』『パワーレッグスピントン』

パワー・レッグクローキングの次に放つ回し蹴り。

『ストライク・ショック』『衝撃収束』『パワーレッグショート』

三連撃のシメとして放つ吹き飛ばし効果のある蹴り。

ドゴォン！！

そのまま垣根は、河原の近くにあつた、マンションに激突。

まだまだ追撃！

『フレイズナックル』『火拳』

エースの火拳そのままの攻撃。

マンションを五つほど焼き尽くしつつ垣根を吹き飛ばし、さらに追撃。

『サーフルス・ペザード』『砂嵐・重』

掌から、砂嵐を発生させその重さを叩き付ける技。

あんなどでかい質量受けたら、生きてられねエだろ。

念のために見に行つてみるか。

『ハイバーロード』『大統領選挙』

高速の粒子震動により、滑るように高速移動する技。滑った軌道からは炎が噴き出す。

「う…………」

おいおい、生きてるのかよ。すごいね、未元物質。

あんなモン食らつてるから、全身火傷＆全身複雑骨折だとしても。
すごすぎるでしょ。

僕がぶち抜いて来たマンショוןに視線を向けた、その刹那。
垣根帝督は立ち上がつていた。

「どうやつたんですか、まつたく、規格外ですね」
未元物質で体を直したつてわけか。

「この俺をここまで追いつめるとはなあ。いくぜ！」

太陽光をその翼に通過させ、殺傷力のあるビームを放つてくる。

『縮地』
『フレイム』
『神火』
『炎槍』
ランス

両腕から、炎の槍を飛ばす。

これは、一本が垣根の肩に刺さつた。

「ツチ」

翼で、自分を包み込んだ後、全方位にビームを放つてきた。

『エレクトリックショット』
『ガトリング』
『荷電粒子砲』
『乱射』

全方向に荷電粒子砲を乱射する。

これで、迎撃する。

「本当に憎たらしい野郎だぜ」

「お互い様だ」

『ハイパー・ロード』
『ストライク・ショック』

『大統領選挙』
『衝撃収束』
『右ストレート』

移動した勢いを乗せて、殴りつける。

垣根が吹つ飛ぶ。好機！

大技を食らえ。

『Game set!!』（和訳：終わりだ！！）

『レ・ミゼラブル』
『鳴呼無情』
『無慈悲』

全方位に『アースクエイクショック』
『地震解放』を放つ技。ただし、この場合攻撃対象が一人。

『地震解放』 16発ぶんのエネルギーを、体を未元物質で補強して

いたとはいえ、直前までひん死だつた垣根帝督が受けたらどうなるか。

見事にスプラッタな光景が出来上がる。

加えて追記しておくと、この学区は完全に瓦礫の山に変わっている。

その夜、学園都市に激震が走る。

「学園都市第一位殺害される。殺害したのは、新しくレベル5に認定された震動能力者。能力名、世界滅亡マグニチコード」

名前は七城優一。よつて、上記の者、第一位と認定する」

僕の転生人生はここからはじまったー。

圧倒的な力……（後書き）

垣根帝督はぼこぼこにされます。

主人公は決め台詞や、挑発に英語を使います。

次は、いよいよ「あの人」に会います！

戦闘スタイル。独自設定（前書き）

今回は主人公の戦闘スタイルと独自設定を書いていきます。

戦闘スタイル。独自設定

戦闘スタイル。

能力を中心に、剣、銃、体術、古代兵器を絡めた複雑な戦闘スタイルを構築している。

「どんな敵にも」

「どんな強さでも」

「どんな大きさでも」

「どんなに規格外でも」

この4つの柱を中心臨機応変に全ての敵に対応出来るようになっている。

さらに、剣術に関しては圧倒的であり、ローマ正教そのものと対峙して、これを粉碎するほどの戦闘能力がある。

「悪魔の力」を使い、その力は天使をもねじ伏せるほどの力。世界最強の近接戦闘能力を持つ。

剣で戦いながら、銃で攻撃。銃を撃ちつつ能力使用。さらには、魔術師でも展開が難しい古代兵器を一瞬で展開、変形させるなど、攻撃に関しては間合いを感じさせない。

その戦闘はあるで、伝説の『忘れ去られたアルキュオネの剣士』を彷彿とさせる。

使用武器。

リベリオン

反逆者と名を冠する、邪神を魔界」と封印した、忘れ去られた剣士に由来すると言われる両刃の大剣。

闇騎士がかつて使っていたと言つ。ミサイルをも弾き返す凄まじい強度を持つ。

また、これを背負っているだけでも魔術は無効化され、魔術に対してもこの剣を振り下ろせば魔術は破壊されるという不思議な力を持つている。遠くのマンションをも両断するなど、斬撃を飛ばしたりすることも可能。

さらには、切れ味が永遠に衰えない、一方通行の反射を貫通もしないが、反射も出来ないなどと言った普通の剣ではありえない性質をもつ。

剣に選ばれた者しか振るえないと伝えられている。

優一は自分の身長より10?以上でかいこの剣を軽々と振るう。

レッドクイーン

血塗れの女王と名を冠する、赤い刀身を持つ片刃の大剣。

リベリオンに流れている「悪魔の力」の波長を変えることにより変形する。

リベリオンと違い、斬撃を飛ばすことは出来ないが、その代わり、流れている「悪魔の力」を噴射剤のように使いつことにより、音速をも超える剣速で剣を振るうことが可能。

闇騎士からのプレゼント。

ここから下は神様からのプレゼント。

M1911・45ガバメント・カスタムモデル・ルガー

主人公の机の中に入っていた大型の45口径の拳銃2丁。

何故か、弾切れすることがない。

正確には、弾切れはするが、マガジンがなくならない。すべて、銃器（超古代兵器は弾丸の概念がない）は同じ性質。

故に、超連射が可能。太もものホルダーに入れてある。これだけは学校でも携帯している。

超連射の時にリロードをどうやっているのかは永遠の謎。

ライフルなみの貫通力を持つ最新型のサブマシンガン。

2丁腰に仕込んである。

M P 5 S D 2

銃口ではなく、銃身内部に消音機能を備えており、高い消音性を誇る。

ショルダーにストックを折り畳んでいられる。

G 3 6

最新型の5・56?口径のアサルトライフル。取り回しがよい。
背中に回してある。

M K · 1 7

さまざまな周辺機器を取り付けられる7・62?口径の次世代志向型バトルライフル。

背中にG36に交差するように回してある。

マウントレールリボルバー 「悪魔狩人」 デヴィルハンター

ショルダーのガンホルダーに入れてある優一の「切り札」

「悪魔の力」を込めた銃弾を放つことが出来、その威力は「神の右席」を一撃で行動不能にする威力。

弾丸ベルトを腰に付けている。

T W I N B A R R E L ツイン バレル

狩猟用の水平二連ショットガンの銃身を切り詰め、片手発射ができるようにしたカスタム銃。

リロードとかどうなつているのよとかは永遠の謎。

戦闘上着 バトルジャケット

武器ではないが、ダンテが着ている赤いロングコート、ネロが着ている黒いロングコートのこと。

ジャケットの裏に大量のマガジンとショットガンの弾薬などが入っている。

腰には「デヴィルハンター悪魔狩人」用弾丸ベルトを装着しており、ズボンには、M1911のマガジンが入っている。

また、コートの裏側には、弾薬の他に、古代兵器も入っている。別名「四次元コート」

リベリオンはダンテのように直接背負っている。

また、学生服のときには、M1911のみ、携帯している。

ファンクス
武器庫

様々な武器、火器、銃器に変形し破壊をまき散らす超古代文明の遺産。

不気味な髑髏と紋様が描かれたスーツケースの形をしている。

デスペラード
殺唄

武器庫以上の中、火器、銃器を内蔵し変形する。周りの全ての物を破壊する超古代文明の兵器。

蛇と髑髏が絡み合う複雑な紋様が描かれたギターケースの形をしている。

また、「斬魔刀」が中に入っている。

ザンマドウ
斬魔刀

日本刀の形をした、魔を斬るための剣。殺唄の中に入っている。次元を斬ることが可能。

ギルガメス
衝撃鋼

生物と同化して、その体の一部を鋼と化す（主に手と脚）超古代文明の金属。

強力な衝撃を生み出す力を持ち、主人公の超能力と合わせ、さらにその威力は増大する。

また、衝撃を蓄積させることで、さらに破壊力が増す。

射程距離は短いがその威力はまさに、『衝擊的』である。

無尽剣

爆発する剣を空中に配置出来るトリッキーな武器。
爆発する剣を無尽蔵に生み出す超古代文明の装置。
生み出した剣は的に突き刺したり、空中に固定したりすることが可能。

たまゝに薔薇をフィーリッシュと共に投げることがあるが、特に深い意味はない。

神裂火織によれば、「我々の使っている力とは真逆の力」らしい。
不幸なことに、優一は様々な魔術結社から命を狙われることに。

殺唄以外は、『デビルメイクライ4』に出てくる武器を少しだけもじつたものです。

独自設定

伝説

遥か昔、邪神を封印した一人の剣士のこと。

『「賢王アルキュオネ」と讃えられた古代文明の王の右腕であり、邪神を魔界ごと封印したと言われている。

しかし、封印と引き換えに人々の記憶から忘れ去られてしまつたと

いつ。』

この伝説を、『アルキュオネの忘れ去られた剣士』と呼ぶ。魔術師が最終的に到達するのは、この伝説の真実だといふ。その戦闘スタイルは、大剣と小型の鎗ごじゆう一つ、選ばれし者の武器を使った戦闘であり、優一と非常に良く似ている。

戦闘スタイル。独自設定（後書き）

オリジナル設定を織り交ぜてみました。
『デビルメイクライ4』の武器をどうしても出したくて……。
ええと、ゴメンナサイ。

転校そして「田惣れー？」（前書き）

姫神のキャラ崩壊が著しい恐れがあります。

転校そして一日惚れ！？

朝起きると、寝室の横の机に書類が置いてあった。

神様からで、「転校手続きを済ませた。学生服と私服は、タンスに入っている。学校頑張れ！」

あ、もし、魔術側の人間に例の剣のことを聞かれたら、『忘れ去られた剣士』の息子と言つておけ。

P・S 私服は儂の趣味で、デビルメイクライ4の

ネロとダンテじゃ

「フザツケンナアアアアア！」

朝一番に大声を出すことになるとは、この場に居なくとも振り回してくれやがる。

本当に困った神様だな。

気を取り直して、時計を見るともう8時15分だった。

急いで学生服を着て、ガバメント一挺を太ももホルダーに入れて、
『縮地』
イノセント・ゼロ

あつといつ今に職員室へ。

「すいません、今日転校してきた七城ですが、月詠先生は居ますか？」

「あなたの足下にいますよー」

ん？

「おわつ！」

ちっちや！そりや目線の下で、見えるわけないよな。

「さて、第一位の七城ちゃんですねー。ついてきてください

原作キャラに会ったの一人目だけ、本当に原作と同じとは。驚くな。

何故か誰もいない老化、じゃなかつた廊下を歩いていると、いきなり子萌先生に質問された。

「七城ちゃんは何故学園都市に来たですかー？」

「これまたデイー卜な質問だな。

「あんまり、べらべら喋りたくないし、こいつときはこれだな。

「それは、秘密です」

ウインクする。

なんとかごまかせたかな。

「つきましたですよー、少し待つていてくださいね」

その言葉の後、子萌先生は教室に入つて行き、騒がしい教室が少し静かになつた。

『SIDE・上条』

「レベル5の転校生がきましたですよー」

今日の朝のHRで子萌先生が言った言葉は少なからず俺たちに衝撃を与えた。

なぜ、この学校にそんな高レベルの生徒が来るのか。
不思議だった。

「入つて良いですよー」

その言葉と共に入つて来た少年を見た瞬間教室は静まり返つた。
長い前髪で右目を隠し、太もものホルダーには、自衛のためだろう拳銃が入れられていた。

いや、それは問題じゃない。

問題は彼の雰囲気だ。口には微笑を称えていたが、目がどこを見ているのか、そう、例えるならばまるで、別の世界を見ているような。俺の右手で触つたら消えてしまいそうなほど儂げな雰囲気。

その雰囲気に教室は飲まれてしまった。

俺はそれよりも、いつも無表情なはずの姫神の瞳がキラキラと輝いていたことが気になつた。

そして、姫神はこうぶちました。

「あなたに。一日惚れした。いきなり。恋人とはいわないから。一緒に帰つたり。デートしたりしよう」

驚きに教室が震えた。

『SIDE：優一』

僕の顔つて阿良々木暦に似てるから、それなりにもとの世界では人気あつたらしいから。（友達談）

まあ、姫神は業も好きだし。

「ええ、構いませんよ」

「…………」驚愕の叫びがまたも響き渡る。

この巨乳は、吹寄さんかな？

「彼女は美人ですし、

「でしし？」

「断られそうな申し出を言って不安で震えてる女の子を泣かせるほど、人間やめてませーのど」

「モウタ」

かわいらしい悲鳴（？）を上げて、姫神は氣絶して僕にもたれかかる。

それを見て、つい佳織を思い出してしまつたらしい。
包み込むような憂いの微笑ほほえみを浮かべた。（友人談）

「さあ……」

熱っぽい吐息（後の青髪ピアス談）を女子全員が吐いた。

「上やんや！第一のカミジヨー属性や！男子軍全軍突撃――！」

青ヒたね、アホだけど、青ヒジキなくて、アホヒテが、
「何ハツバニウチナガ」。集メバ、バレラツニシニ、志れ

「あ」 「あ」 「あ」 「あ」 「あ」 「あ」

サージィンパクト
哭打

相手に向けた掌から、衝撃波を放つ技。

対雑魚用。

「ぎやああああああああ！」

案の定、上条と、土御門は防いでいた。（正確には土御門が上条の後ろに隠れた）

「すごい！何ですかそれ！」

知ってるけど嘘をつく。つかないと色々ヤバいでしょ。

「魔術ですか？」

この言葉を言つた瞬間、土御門の顔が一瞬だけ険しくなつた。おもしろいねエ。

「ああ、この右手は『幻想殺し（イマジンブレイカー）』って書いて、異能だつたら何でも打ち消せるんだ」

「へえ、おもしろいですね」

「俺は上条当麻。よろしく」

主人公だよ！テンション上がるよ！

「七城優一です。震動能力のレベル5です。能力名は世界滅亡^{マグニチコーネ}です」

「敬語じゃなくていいぜ」

「分かりつじやなかつた、分かつた」

これを始まりとして、自己紹介タイムが始まった。

授業をまともに受けるのは久しぶりだなあ。

今日一日は疲れそうだなあ。

転校そして「田嶋れー？」（後書き）

どうだったでしょうか？

原作キャラの口調が似ない。

授業の様子は書けません。「ごめんなさい。

次回は、放課後のことから書きます。

それでは。

ゲーセンと事件（前書き）

主人公またもチートっぽいです。
スキルアウトがドンマイです。
最後にちょっとだけ黒子が出ます。

ゲーセンと事件

僕と上条、土御門、青ピ、吹寄さん、姫神（本人には名前で呼べといわれたがまだ早いと断つた）

この六人で、ゲーセンに行くことになった。昼休みに決めたのだが、吹寄さんはすごい仕切るのが好きだと知った。

あんまり原作では描写されてなかつたような……記憶が曖昧だ。僕自身、以外とゲーセンは好きなので、昼休みに、上条達がその話を始めた時、真っ先に賛成した。

家に一人で住んでいることや、妹が学園都市の外にいること（神様曰く）などを話したら何故か驚かれた。

姫神に、

「私は、寮に入つてない。子萌先生の家に、居候してる。だから、一緒に住もう」

と言われて一悶着あつたけれど、それ以外は特に何もなく、平和だつた。

この話が終わつたあと、土御門に呼び出され、なぜ魔術の存在を知つてゐるのかなどと聞かれたが、『忘れ去られた剣士』の息子だと言うと、慌てた様子で、四方八方に電話を掛け始めた。

それを見ているのはおもしろかったね。

「護衛を付ける。優やんも気をつけてくれ」

「護衛なんていりません。僕は父親からもらつた剣もあるし、兵器もありますから」

「そういうわけにはいかないんだ」

「何故ですか？」

「優やんを狙う連中のこともあるが、優やんの力のことだ。『忘れ去られた剣士の力』を受け継いでいるんだ。その危険性は計り知れない」

「つまり……、僕自身の監視つてことですか」

何様のつもりだ、土御門。

この場で潰してやろうか。

「よほど死にたいようですね……」

僕は左腕を炎に包んで、『殺し』の意思表示をする。

「違う」

慌てない、か。さすがに修羅場は潜つてきてるな。

「優やんの力が暴走しないか見張つとくんだ」
はあ……。

神様に叩き込まれた力が暴走するわけないだろっ。

「問題ないです。父親直々に戦闘技術を叩き込まれましたから

「絶対にないな？」

「暴走したとしても、その力は僕自身の制御コントロール下にあります。問題ありません」

いくら転生したのがばれないようにするためとはいえ、よくこんなに虚言ウソが出てくるなあ。

自分の才能かな、これは。あんまりありがたくもない才能だけど。

「分かつたにゃー。それじゃあいろいろとよろしくにゃー」

ふー。疲れた。土御門つて何考てるか分からぬ所があるからな。
セリフ言葉には気をつけないと。

そして放課後。

補習をなぜか免れた上条と、成績悪いのか良いのか分からん青ビト、
吹寄さん、姫神。

そして、僕。

この、仲のいいのか悪いのか分からんとにかくカオスな集団は、繁華街のゲーセンへと、歩を進めていた。

「なあ、優一」

「何? 当麻?」

「お前つていつ学園都市に来たの?」

「えつと……、ちょいど2ヶ月ぐらい前かなあ？」

上条当麻とは気が合ったのか仲良くなり、口癖のよつになつていてる

敬語も抜けていた。

たつた一時間かそこらで、名前で呼ぶよつになつていた。

「優やんは、どんな工口本を読むんや？」「

「はい、死んでください」

「ばいきつ。

毒舌と共に、ツッコミにしては激しすぎる一撃。（『衝撃収束』状

態での腰のひねりを加えたアッパー）

青ピは吹っ飛んで、壁に激突。普通は一般人には即死レベルの一撃なのに、すぐさま立ち上がりてくる。

実はレベル5とか？

「しかし、それは何なんだ？ 大きすぎるだろー！？」

俺の背中にある、大剣の事かな？ 吹寄さん？

「まあ、くわしくは言えませんが、父親の形見ですかね」「そつか……」

今の僕の服装は、黒の足下まであるロングコート、深紅のワイシャツ（シャツ出し＆第一ボタンを開ける。）黒のジーパン、黒のハイカットスニーカー。

ネロっぽい出で立ち。

リベリオンを左手（僕は左利きだ）で抜けるように、背中に背負い、

太ももにはハンドガン×2、腰にはP90×2。

所詮、武装集団程度しか出て来ないと思つていい。

まさか、一方通行に襲われるなんてことないだらうじ。

そういうえば、そろそろ「絶対能力進化実験」を御坂美琴が知つて、止めに行くんだっけ。で、当麻も止めに行くと。

原作を読んでないから分からいや。

とりあえず、そんな研究をしてるイカれた研究者には消えてもらわないとな。

あとは、一方通行の本音を引き出したりして、英雄サイドに引き込

まないと。

大変そうだなあ。

「ついたにゃー」

「遊ぶぞー！」

着いたようだ。

何か注目されてる。どうしたんだりつへ。

吹寄さんの胸？姫神の巫女さん服？

「いや、お前（優一）の背中の大剣だよ…」

マジですか！？

「お客様。凶器は持ち込み禁止です」

「預けることがあります？」

その場の全員が思つただろう。根本的に何かが違つ。
超弩級の天然さんですか？と。

「いえ、そういうことではなくてですね……」

「じゃあ、あんたが預かってもらいます？」

何かが間違つてる。

絶対何かが間違つている。

全員の意見は一致していただろう。

「まあ、いいです」

「いいのかよ！」

入口に居た全員からツツコミが来た。

「ま、まあ、早く行こうぜ」

それから僕らはゲーセンを回つた。

正確には、パンチングマシンで僕が計測不能の値を出したり、当麻
が両替機に金を飲み込まれたりと、色々あつたが。

そして僕らが外に出ようとしたとき、それは起きた。

「おら、テメ工ら全員金を出せ！」

「頭の上で手を組め！」

はあ、やだやだ。

『SIDE：上条』

そう、来たのは10人以上のスキルアウトだった。
しかも、俺たちの目の前。

「おいテメエが人質だ！」

と、連れ去られたのは姫神。

横の優一の表情にあきらかに影が差した。
だけど、口元は妖しく笑っていた。

まるで、獲物を見つけた肉食動物のようだ。

「人の友達に出手してんじゃねよ」

明らかに口調が変わっていた。

それからの優一は圧倒的だった。

『ショドウノツク 影打』

優一は一瞬で、姫神を捕らえていた男の後ろに回り込み、蹴りを食らわした。

たまらず、姫神を放した所で、俺が姫神を助けに入った。

男は、ショットガンをぶつ放そうとしたが、

その前に瞬間移動して、

『ブласт・ブレード 震動靈劍』

手や脚に震動を纏わせる技。高周波ブレードを造り出すらしい。

『スペーカー 掌握斬』

五本の指に震動を纏わせ、掴むようにして切り裂いた。（俺にはそう見えた）

「ぐああっ！！」

肩口を切り裂かれ、スキルアウトはたまらず悲鳴を上げる。

「テメエ！！」

他の連中が逆上して銃をぶつ放そうとするが、優一がそれよりもはるかに早く動いているため、姿を捉えることができない。

残りの連中のうち、半分はハンドガンで肩や足を撃たれ、行動不能になっていた。

あとは、膝蹴りで天井に叩き付けられたり、
『ヒカルマ』
『縛車』

炎を纏つた回し蹴りで吹っ飛ばされたり、
『エレクトリックショット』

指先などから、ビームを放つらしい。で、肩撃ち抜かれたり、
『荷電粒子砲』
『ファイアモーゼ』
『炎戒』
『火柱』

優一の回りに炎を発生させる、で火傷したり、

最後の一人は、
『フレイムタワー』

『炎戒』から、火力を増し、その名通り火柱を作る。
で顔面を焼かれ、

最後の一人は、

「ふざけんな……」

と完璧にキレて、革ジャンの中から、長ドスを出して構えたのだが、斬り掛かる間もなく、

優一は背中に手を回して、自分よりでかい大剣を左手で片手抜きし、袈裟懸けに振り下ろした。

ズバッ！

長ドスをへし折り、リーダーであるう男を斬った。
思わず叫んでしまった。

「やりすぎだろ！死んでるかもしれないんだぞ！」

「大丈夫。死なない程度に『調節』したから
なんて野郎だよまったく。」

恐らく3分も経っていなかつただろう。たつたそれだけの時間に15人近くを「殲滅」したのだから。

その能力もさることながら、脅かされるのは、その基礎身体能力だ。銃を撃ちまくる手練、膝蹴り一発で大の男が吹っ飛んで行くほどの中体術、そしてなによりも、自分より大きい大剣を片手で振り回せる力と技術。

いくら俺に『幻想殺し』があつても負けるなこりや。

そして優一は近くにあつたパイプ椅子に座るといつて言った。

「あーあ。もう少し楽しめると思つたんだけどなあ」

「せ、戦闘狂だにやー」

うん。そつ思うよ俺も。

少し時間がたつただろうか。もつ上条さんにはお馴染みの台詞が聞

こえた。

ジャッジメント

「風紀委員ですのーー。」

ゲーセンと事件（後書き）

どうだったでしょうか？

主人公の服装はダンテやネロのようなイメージです。

次回は風紀委員の支部に行きます。少し短めになる予定です。

主人公以外の視点が多くなるかもしれません。

原作キャラにやっぱり口調が似ない。

どうしよう。

少年の眞実（前書き）

いつも増して中2感たっぷりです。
氣をつけてお読みください。

少年の眞実

『SIDE・白井』

いつものように風紀委員の事務所へ行き、初春やお姉様、佐天さんとお話していた時、その連絡が入りました。

ここから少し離れたゲームセンターに強盗が入り、人質を取つた、
と。
アンチスキル

警備員が来るまで押さえでいてくれということでした。

初春は戦闘に向いていませんので、わたくし私が必然的に制圧することになるのですわ。

私はゲームセンターなどにはあまりいきませんから、初春にコンピューターで場所を割り出してもらい、すぐさま空間移動いたしました。

「風紀委員ですの！！」

そしてテレポートした私の目の前にあつた光景は、スキルアウトに囲まれて怯えている方々ではなく、お姉さまを狙う類人猿と、その取り巻き二人、巨乳の女性（羨ましいですの！！）巫女服の女性、パイプ椅子に悠々と座る凶器を背中に背負つた殿方でした。

「遅かつたな白井、ゲーセン強盗は撃退されるぜ」

「上条さん、一体何がありましたの？」

「そこの優一に聞いてみな」

「あなたは一体何者ですか？それに、背中の大剣はなんですか？」

「いきなり、何者ですかと聞かれましたか…。僕は七城優一。背中のはまあ、曰く付きの品ですね、詳しくは言えませんが」

「そうですか……。これはあなたが？」

「ええまあ、一樣病院にでも連れて行ってください。行動不能になっていますから」

「分かりました。あなたがこれをやつたのでしたら、支部で始末書を書かなければいけませんので、支部まで飛ばします」

「あ、彼女も連れて行つていいですか？人質にされてしまったので」「構いませうつ

構いませんわ

私達は117支部へと移動しました。

「ただいま戻りましたわ」

「あ、黒子お帰り。どうだった？」

「それがもう終わつてましたの」

「終わってた? ビルにいるんだ?

「私が連れて来た殿方が……あら？」

どういったのかしら?

「すいません、僕にもコーヒーもらえます？」

「わたしも。お願いします」

「えつと、誰？」

「僕は震動能力のレベル5、七城憂一です。よろしく、常盤台の超レ

電
磁
砲

わたしは姫神秋紗。ただの。原石」

「？」

「「「「「ありえない（ですのーーー）（です）」」」」

白井黒子と申しますの
能力はレベ
ル4の空間移動能力ですの
「申し遅れました わたくし
テレポート

「そうだった！！！あたしは御坂美琴 能力とかは知ってるでしょ」「私は初春飾利と言います。能力はレベル1です」

「佐天涙子です。無能力者です」

卷之三

「一つ聞きたいんだけど、初春さん」

「はい、何でしょうか？」

「頭に乗せてるの、花瓶？」

「違います！！」

最初に初春を見た方は何故そうおっしゃいますの！？
まあ、確かに遠くから見ればそう見えますが。

佐天さんの方へ目を転じてみましたら、顔が赤くなっていました。
大丈夫でしょうか？

『SIDE・佐天』

初めて彼を見た時、「かっこいい」と思った。
一目惚れとかじやなくて、イケメンの芸能人を生で見た時みたいな。
レベル5だと聞いた時、私を差別したりするんじやないかと怖かつ
た。レベルの高い人達は、私に軽蔑の眼差しを送る人が多かつたか
ら。

(御坂さんは別！！)

それが怖かったけど、逆に言われた。

「ご心配なく、そこら辺の能力者ザコみたく無能力者を差別しません」
「じゃあ、逆になんで無能力者わたしを差別しないんですか！？」

「逆に、ときましたか。そうですね……」

と七城さんは少し考えこんで、こう言つた。

「そんな事言つてる連中は、能力云々より、人間性が問題でしょう
？」

こんなこというレベル5は他には御坂さんしかいなかつた。
この人には好感が持てた。

「あの、携帯のアドレス持つてますか？」

「ええ、交換ですか？構いませんよ」

「あ、私も（わたくしも）」」

結局四人とも交換か。何だろ？、七城さんて人を惹き付ける雰囲気
があるよね。

どんな人なんだろうなあ。

『SIDE・優一』

「さ、お茶はこれくらいにして、始末書にサインして頂かないと」

「ああ、そうでしたね」

美少女5人も集まるとやつぱり華があるよね。
転生前だつたらモテてるだろうに。

「サインは名前だけでいいですか？」

「構いませんわ」

七城優一と。

「ありがとうございますわ」

さて、後は帰るだけかな。

「もう夕方。早めに。戻った方が良いかも」

「そうだね」

「もう失礼してもよろしいですか？」

「ええ、長くお引き止めして申し訳ありませんわ」

「何かあつたら風紀委員ジャッジメントに連絡してくださいね」

「第二位ですから問題はないとおもうのですが……。あなたがたも危なくなつたら連絡してください。文字通り飛んで行きますから」「あははっ！おもしろいジョークを言いますね。でも、ありがとうございます」

「では」

「あなたは。私を。助けてくれた。ありがとうございます」「当然です。だつて、友達でしょう？」

「はあ……」

「どうしました？」

「ううん。別に。（私は。恋人同士が良い）」

姫神はそう言つと、首を振つた。

溜め息ついた気がしたんだけどなあ。

「じゃあ、先生に僕の家で寝泊まりしていいか聞きますね」

「あ、先生、姫神を家で寝泊まりさせたいいですか？」

「男女がお泊まりするのはどうかと思うのですがー」

「大丈夫です。部屋は離れてるので問題ありません。そこまで、理性弱くありません」

「しかたないですねー。特別ですよー」

「さ、行きましょう」

「晩ご飯は。どうするの？」

「家に材料がたくさんあります。何が食べたいですか？」

「エビフライ。かな」

「分かりました、行きましょう」

「エエが。あなたの家？」

「ええ、部屋はたくさん余っているから、どうぞ好きな部屋に」

「ありがとう」

食事を終えて一息つこうかなと思つてソファに腰掛けた時、姫神が話しかけてきた。

「あなたは。何故敬語を使うの？」

「何故って、口癖のようなものですから」

「嘘。あなたは敬語を使って。自分の感情を。押さえ込んでいるだけ」

「何故そう言いきれるのです？」

「あなたは。いつも。哀しい目を。している。」

「……」

「あなたには。妹さんがいる。そう聞いた。四肢が動かない難病だと」

「そんなこと一度も言つてないー！何故分かるー？」

「あなたの目が。すべて語つていた。この世界の人間ではないことも。私のいた村には転生した人がいたことがある」

「確かに、僕は前の世界で殺された。なぜこの世界に来たのかも、僕の目的も、詳しく述べられない。でも、信じてくれ。いつか全て話すから」

「分かった。あなたが。哀しいなら。私が全て。受け止めてあげる。泣いても。いいよ？」

その優しい声に惹かれて、僕は大泣きした。姫神は、ただ無言で抱きしめてくれた。

家族のこと。妹のこと。

全部僕が背負っていた。泣きながら話したと思う。何を言ったのか泣きすぎて覚えていないけど。

その時僕は、姫神を好きになっていたのかもしない。

「ごめん。恥ずかしい所見せたね」

「大丈夫。あなたがどんな人でも。私は信じる」

「ありがとう、秋紗」

「…………」

「僕の秘密を打ち明けちゃったんだから、名前で呼んでも良いよね」「もちろん！！」

その時の秋紗の笑顔はずっと心に残るものだった。

お風呂に入り、歯を磨き、寝る。

何年ぶりかに泣いたせいか、すぐに寝付いてしまった。

夢の中に闇騎士が出て来て、僕にこう言った。

「お前は『冗談抜きで『忘れ去られた剣士』の息子だ！お前の父親は、5年前に失踪しているが、その時は、邪神の封印が一時的に緩まつていた、そして、あいつは时空魔法を使って、この世界に来た。そして、命と引き換えに邪神を封印した」

「あいつ？あなた、家の父親と知り合いなのですか！？」

「盟友だった。だが、あいつは力がもうなかつたに等しいのだが、命を掛けて邪神を封印した。そして、その力を受け継いで、それよ

り高い資質を示したのがお前だ

「じゃあ、全て知っていたと！？」

「ああ、すまない……」

「いいです。父さんが、僕らを嫌いではなかつたのですから
「そりやか……」

闇騎士は微かな微笑をその色白の顔に浮かべた。

しかし、次には厳しい表情になつて言った。

「恐らく邪神はまた復活するだろう。それを止めてくれ。お前なら
出来る

「僕の彼女に危害が及ぶのでしたら

「もちろんだ」

「分かりました」

「あ、質問いいですか？」

「妹はどうしますか？」

「元気だ。心配するな」

良かつた。

「ではな

僕は夢から覚めて、考えをまとめていた。

僕のやることは、アレイスターの計画の阻止と、邪神の封印。アレ

イスターの計画の余波を始末すること。

多すぎでしょ。

まあ、もう一度寝ますか。

少年の眞実（後書き）

あれー、ここまで展開早くするつもりはなかつたんだけどなあ。
キャラが余計な動きをたくさんしてくれちゃいました。

姫神が言つていた「転生した人」とは主人公の父親です。
実際には転生ではなくて、時空間魔術で、世界の壁を超えて来たのです。
次回では、主人公が襲撃されます。
それでは。

トラブル吸引機！？（前書き）

ほのぼのしていると思います。
主人公が若干惚気てます。
お気をつけください。

トラブル吸引機！？

「おはよう。よく眠れた？」

うん。朝から美少女の笑顔は。ものすごく健康に良いと思つた。
今日は日曜日。学校もないから、秋紗と当麻と一緒に学園都市を回ることにしている。

しかし、当麻がどこかへ行つた。

あいつの寮へ行つて、インデックスへの自己紹介ついでに居場所を知つてゐるか聞いたが、「分からんんだよ」と一蹴されてしまった。

恐らく御坂美琴と「絶対能力進化実験」の事について話しているはず。

当麻と一方通行^{アクセラレータ}が戦つのはもう少し先のはずだ。

垣根帝督を殺害した時点で、暗部間抗争はなくなつたはず。
僕も理事会には睨まれていると思う。

嫌な予感がする。

僕の「予感」は自分に流れている『悪魔の力』が危険を察知してい るらしい。

どう見ても魔術だろうに、身体に異常は起こらない。

頭の中の知識からみると、僕の力は、魔術でも、科学でもないらしい。

父親は正義に目覚めた悪魔だから、半分僕も悪魔って訳か。

まったく、どこの『デビルマイクライ』だよ本当に。

と、秋紗が無口なのをいいことに、僕も思考の海へと沈んで行く。

「あ。着いたよ」

……ああ！！

今僕らは、第7学区の『セブンスミスト』に來ている。

秋紗曰くデートだけど。

「どこから。回る？」

「秋紗の好きな所でいいよ」

「それが。一番困る」

じゃあどうしようかなあ。

うーん。

「女性服を回って行く？」

「うん。それがいいかも」

僕らは今朝、当麻がいないからどうしようか？と相談したあげく、デート兼服を買おう！

といふことになりました。

二人ともまともな服をもつていなし、秋紗に至つては、巫女服だし。

僕だつてある意味特注品？

「うん。これとこれがいいかも」

秋紗が選んだのは、カラフルでおしゃれなワンピースと細いジーンズ。

ワンピースの下にジーンズを履くような感じだった。

「似合つてるよ。秋紗つてスレンダーだから」

女の子の服はよく分からぬけれど、細身な彼女には良く似合つてたと思う。

僕は、黒のミリタリー ブーツに、白地に赤で觸體と英語が描かれるTシャツ、紫のパー カー、黒のゆつたりしたズボンを買った。

僕自身、かなり適当に選んだ。

さあ、食事にでも行こうか、と外に足を向けた時、ドアが吹っ飛んだ。

「全員死にたくなければ手を上げろ！！」

まったく、僕は、どこのトラブル吸引機かよ……。
空力使い（エアロハンド）かな。
いや、もう一人いるか。

「どうだ？」

「問題ないぜ」

はあ。さつさと始末しますか。

「ところが、問題大有りなんだなあ」「んだと『コラ！』

「テメエから死ぬか！？」

と吠えつつ火球を放つてくる。

もう一人は発火能力か。

僕は火球を衝撃を纏つた手で打ち消す。

「な!? 打ち消した!」

「テメエ、何の能力者だ！！！」

「あれ、しらない？世界滅亡^{マグニチヨード}って言えば有名だと思つんだけど」

「彼は。元第二位を。殺した」

「ひ、ひいいいいい」

「ハツ。所詮小物かよ」

味気ないなあ。

「^{シャッジメント}風紀委員ですのー！」

「ああ、白井さん。こっちですよ」

「あ、七城さん」

「僕の名前を出したらどうか行っちゃいましたよ

「分かりましたわ！！失礼しますわ！」

はあ、風紀委員も大変だなあ。

「秋紗、戻ろつか」

「うん。そうだね」

僕たちは家に帰つてお昼を食べた。

あんなことあつたんじゃあ、そとじや食べれないし。

秋紗が、おにぎりとお味噌汁を作つてくれた。

うん。僕の彼女にはもつたいたいと思つぐらいおいしい。

「うまい！」

「ふふつ。ありがとう」

癒されるなあー。秋紗の笑顔つて。

おっと。惚気になつてしまいそうだ。
さて、昼寝でもしますかね……。

「秋紗、一緒に寝ますか?」

「あ。それいいかもね」

横に秋紗が身体を横たえる。

涼しげな香りが、秋紗から香ってきた。
香水でもつけてるのかな?

……すー。

「ふふつ。優一は。本当に。良く寝るね」

と秋紗が優しく微笑んでいたのを僕は知らない。

夕方、あんな事が起ころるなんて、このときの僕は頭の片隅にも無かつた。

トラブル吸引機！？（後書き）

いかがだつたでしょうか？

今回は戦闘はありませんでした。ほのぼのした話にしたつもりです。
次回は夕方から、夜にかけての話です。

激しい戦闘の予定です。

襲撃1（前書き）

主人公が殺人鬼と化しています。
出血も多いです。
お気をつけ下さい。

ん? 今何時だらうか。

昼寝して2時ぐらいに起きるつもりだったんだけどなあ。

「秋紗、今何時?」

「えーと。3時だよ」

うわわわ、寝すぎた!!!

何となくヤバい気がする。

外に行つて様子を見てこないと。

嫌な予感がビリビリ語りかけてくる。「外に出る!...」と。

「ちょっと出かけてくる。帰りは……、分からぬかも」

「分かった。気をつけてね」

外に出て、走り出したとたん狙撃。マジですか。垣根帝督殺害の影響はそんなとここまで広がっているってのか。

「アイテム」「グループ」には会いたくないな。

原作キヤラを敵にはあまり回したくない、麦野沈利とは、あんまり相性がよろしくない。

と、思つたら目の前には駆動鎧^{パワードスーツ}。

恐らく今考えられるのは、学園都市暗部の襲撃。もしくは僕のこととを消したい魔術結社。

この二つ。

まだ夕方、魔術結社が部隊か何かを送り込んでくるのなら、夜のはず……。大部隊で動くには夕方では一般人が多くすぎる。となると、暗部の襲撃か?

それか第三者か……?

「クククッ。第二位を殺した実力はあるようだな」

「邪魔です。死にたくないなら、どうしてください」

「ふん。お前はここで……！」

目の前の誰かさんが喋っているけど無視。

『AIR TRICK』

姿が消えるほど高速移動で、相手の頭上に出現する技。
「悪魔の力」を使っている。

「なつっ！」

『アースクエイク』

『地震解放！』

誰かさん、仮に殺し屋Aとしようか。

殺し屋Aの頭上の大気を碎いて駆動鎧ごと潰す。

それを合図としたように、暗部のみなさんがご登場。
銃やなにやら持つていらっしゃるから、下つ端だらつ。

「撃てえ！」

『リミテッド・アタック』

撃つたつて『無駄遣い』で無効化されるだけなんだよ。
加えられた衝撃力を計算、能力者に被害が及ぶレベルなら全て空中
で停止させられる。

ベクトル攻撃ぐらいじゃないとダメージ通らないし。
あ、あとは『幻想殺し』か。ダメージ通るのは。

「効いていないだと」

当たり前でしょに。こちとら垣根帝督殺してんだよ。

「はあ、さつさと消えてください。今だったら追つかけたりしませ
んから」

「うるせえ！」

僕を囲んでいた内の一人がナイフを持って突っ込んでくる。
僕にたいして突き出されたナイフは虚しく空中で停止した。

「効かないんですねー」

『バシュン！』

『エレクトリックショット』

『荷電粒子砲』

『ロングギュス

荷電粒子砲の応用技の一つ。相手の頭か顔面を掴んで、「圧縮され
た荷電粒子の槍」でぶち抜く。

「はい、まずは一人目……」

「…………」

後ろの奴が無言でアサルトライフル撃つてくるから、
タンツ……。

「なにつ！？」
スカイダンス
『飛空』

足から衝撃を放出して爆発的な脚力で空を駆ける技。
で、弾丸避けて、

空飛んだ勢いのまま踵落とし。

「ぐあつ！！」

バキッと音がして、肩が砕ける。

『衝撃収束』

で腹を殴りつけ吹っ飛ばすと、

前方5人の連中が怯んでる隙に、

『エレクトリックショット』
『アンチマテリアル

『荷電粒子砲』『弩』

蹴りと共に放つ高威力の荷電粒子砲。イメージとしては、黄猿大将の足から放つレー・ザー。

ドキュンツ！！

「ぎやああああああ！！！」

上半身が吹っ飛んで終わり。

最後の一人は両腕に発生させた『震動靈劍』
プラスチ・ブレードで斬り上げてさよなら。

「ほう。やるね」

どうやら本隊が到着したらしい。

「メンバー」と「ブロック」、「スクール」の残党。
そんなどころかな。

「覚悟はいいか？」

「あなたがたこそ

博士と査楽かな？

シュンツ

「死ね！」

確か原作によると、『死角移動』
キルボイント一方通行による仮称だったか？

自力で11次元上の理論値を算出できないため、他人の位置情報を基にする必要があんだけたな……。

『伝説の傭兵』

「な、どこに行つたね！？」

こうすればお前は移動が不可能だ。

『伝説の傭兵』は攻撃をすると自動的に解除してしまうが、この距離なら外すことは無い。

『神火』
『陽炎』

両手の指から、炎の弾丸を連射する。

「あつっ！ふざけやがつ」

『ドスツ』！

『ブラスト・ブレード』
『震動靈劍』
『滅殺斬』

震動を纏わせた手刀で相手の心臓を貫く。

無論、瞬殺だ。

『貴様ツ』

博士だけ。原作では垣根に瞬殺されていたような。

『震動靈劍』
『螺旋抜斬』

腕の造り出した高周波ブレードを火花が出るほど高速回転させ触れたものを切り刻む技。

「ぎやああああああああああああああ！」

そんなものを腹に叩き込まれてはたまつたもんじゃないだろ？
あれだけ血が出てるんじやほほ即死だろ？

「くつ、全員退避しろ！」

「ブロック」の連中だな。

警備員やつてる女人以外は消そ？
か

『大統領選挙』

で逃げる奴らの前方に回り込み、

リーダー格の奴にたいして、

『ストライク・ショック』
『衝撃収束』
『閃崩掌打』

衝撃を纏つた強烈な掌底突きを放つ。

「がはつ！」

並の人間なら、内臓破裂つてとこる。

後の二人は腰から抜いたP90で蜂の巣にして終わりだ。ちなみにリベリオンは目立つので、家に置いて来ている。代わりに右の腰には斬魔刀ざんまとうがぶら下がっている。

ダンテが着ている赤いロングコートのおかげか、ここまで來るのに、誰にも見咎められていない。

まあ、刀抜くほどのレベルの相手じゃなかつたけどな。

「何故私を殺さない？」

「あんたは警備員アンチスキルだろ。暗部抜けてそつちに専念するなら殺しはないです。さつさと消えてください」

「ありがとう……」

名前は忘れたけれど、その人だけ逃がして周りを見渡して見ると、死体、死体、死体。死体の山。

20人ぐらいで襲つて来たけど全部返り討ち。

人を殺す、というか、敵を殺すことに容赦が無くなつた。

元々父親が悪魔殺しまくつてゐるし、邪神封印してゐるから、敵には容赦がない所を血として受け継いだのかな。

秋紗には知られたくないことだね。

僕は家に帰つたが、案の定秋紗に見つかり、大目玉を食らつた。

「何を。してゐの。これは。殺人なんだよ」

と怒られたが、学園都市の暗部が襲つて來たこと、そして、魔術師が僕を狙つてくる可能性、秋紗も巻き込まれる可能性など、敵を殺さなければ僕と秋紗の命が危険にさらされることを2時間かけて力説したら、納得はしてなかつたけど、許してくれた。

「でも。あんまり。殺しちゃだめ。腕一本切り落とすぐらいで」と言つたのには驚いた。

「もう夜。食べものも。あまり無いから。買い物に行こう

「分かつた」

まさか、買い物の帰りで、僕の予測が当たるとは。
僕は本当に呪われているらしい。

襲撃1（後書き）

いかがだつたでしょうか？

主人公は殺人を肯定していませんが、否定もしません。
罪の意識はあるのでしょうか？

それは次回と、そのまた次回で明らかになります。

闇の兆し（前書き）

主人公の殺人への考え方がでました。
今回はかなりシリアスです。

闇の兆し

夜の道路。

秋紗とたわいもないおしゃべりをしながら、スーパーへの道を歩く。秋紗の吸血殺し（ディープブラッド）は吸血鬼を誘い出す。

僕の「悪魔の力」は悪魔を誘い出す。

もつとも、地獄〇に魔界の扉が開いていないと入ってこないし、悪魔を信じていない場所にはあまり悪魔は現れない。

それより怖いのは、悪魔の高位種族である、魔族だ。狡猾な知恵を持ち、強力な闇の魔術や、攻撃を繰り出す。

魔族の支配階級は魔王や、邪神、悪魔創長、魔帝、などと呼ばれ、人語をも理解する。人に化けることまでするのだ。永く生きているものは、人より遙かに知恵を持つものもいるのだから。もつとも異質なのが、混沌の悪魔。この世界とは別の混沌の世界からこの世界の歪みを通してやってくる。

4大神と呼ばれる4柱の邪神が司っていると言われる。

詳しく述べは僕も知らない。情報が少なすぎるのだ。

何故、こんな事を言い始めたのかと言つと、僕らの目の前に立ちはだかつた「スクール」の一員、『心理定規』^{メジャーハート}がいきなり苦しみ出し、化け物（太った触手をもつ巨大な一足歩行のナニカ）に変わったからだ。

「きやああああああああ……！」

側にいた女性が悲鳴を上げる。

「いやああああああああ……！」

秋紗も悲鳴を上げる。

「うわああああああああああ……！」

男性が恐怖の叫び声を上げる。

僕はというと、背中にまわしてあつたMK・17を取り出して固まってしまった。

そりやそうでしょ。いくら敵対していたとはいえ、顔立ちの整つた少女が、化け物へとかわったのだから。

氣を取り直してMK-17を連射連射連射。

ガシャン。ハ、少藝が居りて、一から、ガシャンを出で

マガジンをまた叩き込んで連射。

「効いてないか」

なら、これはどうだ？

少華山

触手を焼き付くし
本体を半分ぐらいいそぎ落として
それでも倒れ

「効いてないね……」

卷之三

アーチの下に、黒い櫻と白い桜が咲いており、春の香りが立ち込める。

つて所か。

まあ、『悪魔狩人』出すレベルの敵じゃないでしょ？
『武器庫』『変形』

白口紅

真っ白な色をしている。

バレルが2つ備わっているため、ほぼ同時に2発の弾丸を発射することが可能。これにより、悪魔の強固な装甲を撃ち抜く事が出来る。リロードとかどうなってるのよという疑問は僕にも答える事が出来

ない。

僕自身の「悪魔の力」を銃身にチャージする事で、強力な『チャージショット』を撃つ事が出来る。

威力を増したり、敵を燃焼させたり、はたまた爆発を起こさせる強

力な攻撃も可能になる。

通常の銃撃『ノーマルショット』と違つてパワーが有り余つている
ようで、さすがの僕もその威力を持て余し気味。

『チャージ CHARGE SHOT 2』

1より威力が上がつた『チャージショット』
弾丸がヒットした相手を燃焼させる。

「よし！動きが止まつた！」

悪魔そのものじゃなくて、人が悪魔の『核』になつてゐるなら『人』
を悪魔から引き剥がしてやればいい。

ようは負の思念が化け物の形を取つて現れたのだろう。そこに悪魔
が取り付いた。

その時のための『リベリオン』じゃないか。

「Go to back Monster！」（和訳・お家に帰
りな化け物野郎！！）

『ステイインガ STINGER』

強烈な吹き飛ばしの威力を誇る高速突進突き。

ドゴォン!!!!

化け物は吹つ飛び、ビルに激突。

だんだんと『メジャー ハート』心理定規の姿に戻つて行く。

「う……私は何をしていたの……ガフッ……」

案の定彼女は吐血した。

悪魔に身体を明け渡した人間はよほど精神力が強くないと、その力
の残滓（もちろん人にとつては害悪にしかならない）の影響で全身

から血を噴き出して死ぬ。

しかも、死ぬまで力に身体を蝕まれるから、大体は「苦しみ死に」
するはめになる。

そうなる前に眠らせてやるのが礼儀だ。

「グフツ……一体私はどうなつてしまつたの？」

僕に聞いてくるか。

「自分を失つて、この世のものではなくなつたのですよ。このままだと苦しみながら死ぬ事になりますから、楽にしてあげます」

「そう……ガハツ！ ありがとう」

自分が何をやつたか理解していたのかな……。

……、殺す人間に「ありがとう」と言われるほど辛いものは無い。このときばかりは殺すしか救い方がない自分を殺したくなつてくる。クソッ……！

僕は気づいていなかつたが、僕の目からはひとすじの涙がこぼれていた。

秋紗は涙に気づいて僕に駆け寄り、右手を握つてこう言つた。

「大丈夫。私が。ついてる」

その優しさにまた涙がこぼれたかもしれない。

「安らかに眠つてください……」

僕がそう言つと心理定規は「クン」と頷いた。

『隻眼の紋章』
サヴァイアリ

左腕を炎に包んでの掌底。

バワン！！

その一撃は心理定規の頭部の半分を焼き剥いだ。

「行こう。買い物へ。悲しい気持ちは分かるけど」

この時の秋紗の優しさには心が痛んだ。

原作には100%無かつた事。

明らかにおかしい。すでに原作は崩壊を始めているのかもしない。学園都市の人間が悪魔と化すのは確率的にも、どんな計算をしてもありえないはずなのだから。

邪神の復活はあつえることなのだろうか。

気を取り直して。スーパーに着きました！！

闇の兆し（後書き）

いかがだつたでしょうか？

主人公は敵には容赦がないけれど、悪魔に飲み込まれてしまつた人や何かのために戦つている人には情け（即死などの）をかけます。しかし、自分、守るべき人の命を狙う人間、自分の欲望のためだけに動く人間には容赦の文字もありません。

一方的な虐殺になります。

おそらくメインヒロインは姫神になりそうです。

ほかにも2、3人絡んでくる予定ですが。

次回は魔術結社に襲われまたもやバトルです。

襲撃2（前書き）

主人公やつぱりチートっぽいです。
でも、相手が雑魚だからでしょう。（多分）

「何を。買おうか」
「うーん、昨日魚食べたからお肉にでもする?」
「そうだね。肉野菜炒めにしよう」
「秋紗の野菜炒めかあ。おいしそうだなあ」
「ふふつ。楽しみに。してて」
秋紗はものすごく料理がうまい。僕よりはるかに。
「とうまー、お肉お肉~!~!~!」
「おい、まじかよ。ここで会うのですか!~?」
「インデックス、上条さんはお金がないのでせつよ」
「いいからお肉~」
はあ。あの食欲魔人め。当麻も大変だよなあ。
「おい、当麻」
レベル5だから金は余るほどもらってるし、少し協力してあげましょ
うかね。
「だれでせうか?つて優一か」
「お金ないんでしょ。僕レベル5だから、出してあげるよ」
「そんな、大丈夫だつて。借りても返せないし」
「じゃあ、僕がピンチになつたら助けてくれるつてことでいいよ」
「そんなの、金があるとかなしとかでも助けるわ」
当麻がものすげく真剣な顔で言つたのがなぜかおかしかった。
「あはははっ!そこまで真剣にいわなくても」
「な、何で笑うんでせうか?」
「僕は第一位ですよ?そちら辺の雑魚に殺される危機はないです。リベリオンもありますし」
そう言つたら、インデックスが目の色を変えた。それはそつだらう。
伝説の代物が目の前にあるのだから。
「それはほんとなのかな!~?」

「本当に背中に背負つてる大剣がそうです」

「えっと、上条さんはリベリオンってなんなか分からいんす

が」「が」

「伝説の悪魔殺しの剣なんだよ」

「僕が背中に背負つてる奴がそつです」

「はあ……」

当麻は何が何やらと叫び顔をしてるな。

まあ、こんな話をしている間に会計も終わって、荷物を袋に詰めた
りしているわけだが。

スーパーを出て、途中までは当麻達と一緒に。
土手を歩いてる時、僕は何かを感じした。

「あ、魔術の反応があるんだよ」

「それも、相当の数のな…」

「なんだって！？」

当麻の驚愕を合図にしたかのように前方に無数の魔術師が湧き出で
来た。

「秋紗、僕の後ろに！」

「うん！」

リーダーらしき男が進み出て来て僕たちにこう告げた。

「我々は、魔術結社『古き月の加護』。悪魔の息子よ、その命もう
うござ」

「悪魔の息子！？どういう意味だ！？」

「土御門から聞いていなかつたのか！？」

「そんな事一言もきいてないぜ！？」

「あの猫野郎！？」

「猫じやないに！？」

「土御門！？」

「彼ですか。『忘れ去られた剣士』の息子といつのは

「そのようだね」

めいめい、マジか？

神裂火織とステイル＝マグヌスかよ。

私に

「あ、言わなくても知ってる。神裂火織と、スタイル＝マグヌスでしょう？あなた方は有名ですから」

「喋つていると死ぬぞ！ 悪魔の息子よ！」

「つるせ正」

ヒュンツ！
『縮地』 イノヤント・ゼロ

シガン

「震統」

震動を纏つた人差し指で貫く技。

二三三

卷之三

場が騒然とする。

当麻はおそれくお怒りだらう

卷之二

假
死
机

ぬ。
分かつ
てくれ

「クソッ！！！」

そりゃあ、納得出来るわけないよな。救世主なんだし。

あーあ、治井つむぎ

「肉食加工品にしてやるよ」
ミートペティ

『震動靈劍』『微塵斬』

「ギヤああああああああ相手を細かく切り刻む技

スプラッタな以下略。

『七閃』

うん。ワイヤー攻撃だね。

「死ねっ！」

「うおつとーーー！」

「あぶねえーーー！」

うざつたいな。

『砂丘の神柱』

クナイかなにかみみたいな飛び道具を飛ばしてくれる。

巨大な砂の壁を立ち上げ、攻撃を防ぐ技。

「大丈夫か？当麻」

「すまん。ありがとーーー！」

ヒュツ……。

『T A B L E HOPPER』

敵の攻撃をぎりぎりまで引き付け、わずかな移動で攻撃を避ける技能。

バン……！

僕は太ももから抜いた2丁の・45口径自動拳銃、その名も、

『天使＆悪魔』で相手を撃つ。

左手用が天使。右手用が悪魔。

ちゃんと英語で彫つてあるのだ。名前が。

こいつも『白口紅』と同じように、『ノーマルショット』と『チャージショット』がある。

「食らいやがれ！」

『T O S o m e T i m e』

2方向に銃を向け、時折方向を変えて超連射。上下左右前後のかなりの広範囲に弾丸をバラまく。

例えるならば『GAN-KATA』

マガジンを交換しなくても銃弾が出続ける。

引き金を一度引くと2連射してくれる。

「ぎやああああ！！！」

僕の周りにいた魔術師を撃ち殺した後、後方に固まっている連中に

不意打ち。

『エレクトリックショット』

『荷電粒子砲』

『光矢』

上空の大量の粒子を一気に震動させ、極太のレーザーを天から放ち、敵を焼き尽くす。

「これでかなり減ったかな」

「おらあつ！」

パキンッ。

おお、『幻想殺し』も活躍してるね。

「食らえつ」

危ないなあ。

「よつと」

『マスタンガ』

敵を踏み台にし、空中に飛び上がる。

『MUSTANG』

『アランクス』

『武器庫』

『モードチエンジン』

『ジエラシ』

『嫉妬』

『アランクス』

『武器庫』

『モードチエンジン』

武器庫が2つに割れて、中からガトリングガンの砲身と弾倉が飛び出していく。

「あれだけの人数をたった数分で！？」

と驚いている奴の胸ぐらを掴み、地面に叩き付ける。そして『ストライク

『ショック

『収束』のエネルギーを直接解放して攻撃。

バゴォン！！

ビキビキッ……。

余波で地面まで割れる。

残り8人。

『黒剣』

『コケン』

『弧月』

リベリオンを薙ぎ払うように振り抜き、円範囲に斬撃を飛ばす。
ズズズツ、ズウン！！

僕を囮んでいた魔術師の首を飛ばし、遙か遠くのビルさえ西断する
威力を誇る。

一人はスタイルが捕らえており、その男に尋問をするといふ。

僕らはこの場からそそくさと、立ち去った。

「もう出来るよ。早く。食べよう」

戦闘の被害に遭わないよう、家に帰していた秋紗の出迎えを受け、
秋紗特製の肉野菜炒めを食べて、その口僕は度重なる戦闘の疲れで、
ソファで眠ってしまった。

「君は。一体何を。隠しているの？」

そう秋紗が呟いていた事を僕は知らない……。

襲撃2（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今回は魔術師の襲撃でした。

だんだん原作の様相を呈していなくなっている。

次回は日常＆プチ戦闘です。

それでは。

東の匂の日常ー（前書き）

朝の話です。

それだけです。他には何も。

僕は昨日ソファーで寝た。

度重なる戦闘の疲労のためだ。いくら転生者で「悪魔の力」を使えるとは言つたつて、この世界に来る前までは、普通の人々に比べると少し違う生活を送つて来たものの、戦闘、殺害、襲われる。なんてことは無縁（人生の最後は除く）だったのだから。いきなり襲われるやら、強盗に巻き込まれるやらもう本当に死にそうです。

実際の所は、身体が半分吹っ飛んでも再生するような化け物じみた再生力と、心臓を貫かれて死なない生命力があるらしい。

（頭の中の知識より）

これは僕が半分だけ『悪魔』だからだと言つ。

父親は伝説だし。普通の人間じゃなくて、純血の魔人らしい。化け物じみた再生力は、父方の祖母が吸血鬼だかららしい。つまり僕は半分人間、半分悪魔、4分の1吸血鬼。

この前に闇騎士が夢枕に立つた時に教えてくれた。というかそんなに化け物じみた再生力があるなら、刺されても死なんだろうに。

闇騎士曰く、「一度死んで、力が目覚めたのだろう」だそうです。はい、ふざけんなー。ちょっと力の発動遅いからー。と虚空に突つ込んでもむなしいだけなのでやめよう。

そんなことを考えながら起きたときの時間は午前3時。
何でこんなに目が早く覚めてしまうのだ、と悪態をつきながら起き上がる。

2度寝しようかと思ったが、それをしたら遅刻決定なのでやめた。
転校して2日目（日曜日を除く）でいきなり遅刻は不良じやん。

心理定規の怪物化の時に使つた銃がまったく効かなかつた点について思考を巡らす。

『白口紅』は効いた。『破魔』の力があるのだろう。
武器庫は超技術だ。

さらには父親も使つた武器だ。悪魔には効くだろう。

しかし、MK・17は効かなかつた。おそらくこれは、MK・17

が発射した弾丸が『普通』

『デバイルハンタ』

が発射した弾丸が『普通』

だから。

『悪魔狩人』は違う。

『悪魔狩人』の場合は、僕の「悪魔の力」を直接練り上げて高濃度にし、弾丸の形にしているのだ。

普通の銃のまま僕の「悪魔の力」を撃ち出したら、その力の反動で銃そのものが崩壊する。

僕の方も疲れる。

だから、僕の持つている全ての銃を対悪魔用にアップチューン&カスタム。

それと同時に「悪魔の力」を基に魔力を生成。

僕独自の『破魔の術式』を複数組み上げる。

そして、『破魔の術式』を複雑に組み合わせさらに強力にする。

それで出来た術式を銃と周辺機器に刻み込む。

さらにマガジンにも同じ術式を刻む。

弾丸にはその術式を重ね合わせて術式同士の結合を強化したもの水流し込む。

無限だし、今持つている銃の弾丸全てをあわせると軽く百万発は超えるだろう。

そななものにいちいち術式を刻んでいたら日が暮れるじゃ済まない事になる。

だから、「流し込む」

僕の魔術は僕自身の生命力を使つていてる訳ではない。「悪魔の力」を使つていてる。

だからほぼ無限に魔力が生成出来る。

魔力と呼んでいいものかも分からぬ。

束の間の日常ー（後書き）

次回は姫神が起きてくる所からです。
学校もあります。

束の間の日常2（前書き）

主人公は訓練をしています。

彼があれほど強いのは日頃の鍛錬（笑）のおかげでしょうか。

束の間の日常2

銃のアップチューンも終了した。しかし、こんな喧しい作業を自分の部屋でやつていたら迷惑きわまりないので、地下の訓練場兼武器開発室兼銃火器倉庫で作業をする。

神様も凄いものを作ってくれたな。
地下訓練場は恐らく1?四方はあるだろう。さすが神様。やる事なす事すべて規格外だ。

時計を見ると、4時。

まだまだ時間があるので訓練でもしますかね……。

自分の部屋へ戻り、殺唄のチャックをジジジ、と開け、斬魔刀を取り出す。

こんな芸当が出来るのも僕が伝説の息子だから。普通の人人がこんなことやつたら精神が崩壊して死ぬ。
殺唄を開く事が出来るのは相当の魔力を持つ者が、殺唄そのものが認めた人間しか開けられない。

訓練場に斬魔刀を持つて入ると、自動で動く糸人形の様なロボットマリオネットがどこからか出てくる。もちろん、このロボットは武器を装備している。無論、実戦形式で戦うから下手打つと死ぬ。
僕の規格外の再生力があつてこそ出来る訓練だと思うね。

「クンレンカイシシマス。キヨウハ、キンセツセントウラメインニシマス」

こここのロボットには高性能AIが搭載されており、設定した訓練プログラムにそつて訓練をしてくれる。

しかも、複数体出てくる。

僕はロボットを遠慮なく破壊する。

一体どこからこの高性能ロボットを調達しているのかは僕にはさっぱり分からぬ。

神様の領分だらうから口を出す訳にも行かないだらうけど。

こんな説明をしてる間にも、ロボット達は槍を突き出したり、剣をふりまわしたり、バズーカ撃つて来たり、ライフル乱射してきたりと結構危ないことになっている。

『BLOCK』 『ブロック』

悪魔の力を敵の攻撃接触面に集中させ、ダメージを軽減する技。ジャストタイミングでブロックすると、上位の『ROYAL BLOCK』が発動する。『ロイヤルブロック』の場合は、すべての攻撃を無傷でやり過ごせる。しかし、効果は一瞬。

『ブロック』、『ロイヤルブロック』をするごとに、『ロイヤルゲージ』が溜まって行き、それを解放することで敵に攻撃したり、持続時間は短いがどんな攻撃でも通さない魔力の鎧『王鎧』が発動可能になる。

この防御中心の戦闘スタイルを『護衛騎士』と言つ。

まあ、戦闘スタイルと言つても、複数あるのでその都度説明しますよ。

「よつ、ほつ」

僕は攻撃を躊躇しながら、一番近くにいた、ロボットに肘で一撃。くの字に曲がって吹つ飛んで行つた所で前方に向かつて右拳を叩き付ける。

『拳征』 『ケンゼイ』

拳の形をした衝撃波を放つ。

これで1体目。

2体目には突き出して来た槍を『震動靈劍』^{（プラスチックフレード）}で叩き折り、接近して、『発泡両掌斬』^{（スパークリングデイジー）}

震動を纏つた両手を勢いよく広げ、凄まじい衝撃と共に放射状に広がる斬撃を放つ。

この技の余波で3体が風に飛ばされた紙のように吹つ飛んだ。

「ジユウゲキ、カイシ」

機械的な音声と同時にライフルの射撃が来る。

僕は走つて銃撃を躱す。

だが、優秀なAIを搭載しているせいか、見越し射撃を使ってくる
——避けられない！

なんちやつて。
『スピード』

『スピード』

5秒走るとより速く走れるようになる特殊技能。

ギュイン！
『ダッシュ』

『ダッシュ』

『スピード』から方向転換し、さらに速度を上げる技能。

「ミサイル、ハッシュ！」

「遅い！」

ミサイルを撃ち込まれる前に逃げる。

『スカイスター』

空中に魔力の足場を作り、それを蹴つて高速で空中を水平移動する
技。

ロボットとの距離が開いた。

『AIR TRICK』

姿が消えるほどの高速移動をし、敵の頭上に出現する技。

『MUSTANG』

敵を踏み台にして空中に飛び上がる。

ロボットよつ少し離れた所に着地。

このように回避、高速移動を中心とした戦闘スタイルを『奇術師』と
呼ぶ。

『疾走居合』

『疾走居合』

高速で相手に突進し、強力な斬撃（居合）を繰り出す技。

『バットウタングリ』

『抜刀一段斬』

抜刀し相手を斬り上げ、空中へと打ち上げたあと、共にジャンプし、

片手斬りに斬り落とす技。

「アトイツタイデス」

僕は斬魔刀を納刀した後すぐさま背中に手を回し、リベリオンを振り下ろした。

しかしそれは、きこちないバックステップで躱される。

僕はさらに踏み込み、技を繰り出した。

『リベリオン REBELLION COMBO A』

袈裟 逆袈裟斬り上げ 回転斬り下ろしと続く攻撃ベースの速い3連撃の基本コンボ。

出が速くテンポも速めで、隙が小さく扱いやすい。

「訓練終了です」

と電子音声のアナウンスが入ると同時に秋紗が下りて來た。

「おはよづ。タオルあるよ?」

「ありがとう」

タオルで身体を拭きながらリビングへ上がる。

シャワーを浴びたあと、簡単な朝食（サンドウィッチ）を食べて学校へ向かった。

束の間の日常2（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回は学校から放課後にまたがるお話です。
主人公のツツコミ（？）が冴えます（笑）
それでは。

束の匱の日常③（前書き）

佐天に春の予感！？

束の間の日常③

学校に着いた。

土御門は学校を休んでおり、いない。何らかの事件が起きたのであろうが、当麻に影響が及ばないのならば問題ないだろう。

「おはよー、当麻」

「ああ……、おはよう」

当麻の顔色が悪い。どうしたのだろうか？

十中八九『絶対能力進化実験』のことだと思うが。

「どうした？ 大丈夫か？」

「ああ……」

あきらか大丈夫じゃないだろうが。

つたぐ、一方通行の事を一人で背負い込む氣かよ。

「ちょっと来い」

と当麻を屋上へ連行する。

「なにがあった。話してみる。力になつてやる」

そう言つと当麻はぽつりぽつりと話し出した。

「妹達」^{シスターズ}のこと、超電磁砲^{レールガン}が一方通行に挑み、敗北した事。

今日の夜、実験を止めに行く、と。

僕が黙つて話を聞いていると、当麻は何か閃いたのか、唐突に聞いて来た。

「お前、学園都市最強に勝てるか？」

僕は嫌な予感がした。当麻の口ぶりから——死ぬ気なのではなかろうか。

そんなことは絶対にさせない。

僕もこんな熱い側面があつたのだと、今更ながらに気づいていた。
転生前では一欠片も見せなかつた僕の別の面。

思考が高速回転していくのを感じる。

僕と言う崩壊因子^{イレギュラー}が入った以上、原作がどう転がって行くか、それは神様ぐらいでないと分からぬだろう。

それに、一方通行はただのもやしだ。

格闘戦なんてやつたことがないだろ？

その点では僕と当麻に分がある。

自分の演算能力では一方通行には遙かに及ばないだろう。

だがしかし、僕の『悪魔の力』が加わつたらどうだろうか？

この正体不明の力が。

理論や計算式などでは計れないこの力。

僕が能力以外の力、つまり『悪魔の力』やリベリオン、銃、超古代兵器^{オヤジ}を使うのは僕自身の『直感』だ。

そこに理論で量れる物は存在しない。

そこにあるのは少しの『思考』頭の中に叩き込まれた『経験』そして、『直感』

最悪、僕一人で倒せる相手だ。

いける。そう僕は確信した。

「倒せる」

「そうか！」

僕は陽動を引き受けた。

当麻の正義感から言って一方通行を殴らないと気が済まないだろう。まあ、途中で僕も乱入するけど。

自己紹介をかねて。

「貴様らー！何をやつているー！」

凄まじい怒声と共に飛び込んで来たのは吹寄さん。

「もうHRは始まっているのよー何をやつているのー」

うつわあ。凄い剣幕。こりやヤバいぞ……。

すかすかと大股で進んで来た吹寄さんは、当麻に強烈な頭突きを食らわせた。当麻はずるずると地面に崩れ落ちた（笑）痛そうだなあ。

そうのんびりしていたら今度は「ひたて」に来ていた。

まずい！？

ビュオーンッ！

「うわっ！」

恐ろしい速度で突き出された正拳突きを間一髪、バク転して避けた。

「呆れるほどの身体能力ね…」

「そりやつーどーもっ！」

僕が受け答えしている間に前蹴りやらフックなどが飛んできている。

「もう逃げられないわよー！」

「まずい！後ろはフーンス……！」

「ゴンーーー！」

…………。当麻に食らわせた以上の頭突き。

当麻のように意識は失わなかつたが、一瞬意識がアンドロメダ星雲の彼方に飛んで行つた。

吹寄さん、オーバースペックすぎでしょ。

僕と当麻は吹寄さんに引き摺られて教室に連れて行かれた。

泣き顔の小萌先生に怒られて気まずくなつたり、青ピに殴られそうになつて反射的に蹴り飛ばしたりと、H.Rでも結局騒いだので、無料サービスの頭突きを受ける事になつたが。

今やつている授業は心理学らしいが、僕はレベル5の時点での授業に出なくともいいらしい。

まあ、いろいろやらなきや行けない事も増えてくるだらうから、その時にこの特権を使わせてもらおう。

「七城ちゃんー、いまのはなしきいていましたですかー？」

「えつ？き、聞いていませんでした」

「ちゃんと聞かなきやダメですよー」

「はーい」

グースカピー……。

バツコオオオン！－！

な、何だ！？

「寝るな！馬鹿者が！」

いかん！おもしろくないから寝てしまった。

グースカピー……。

結局爆睡。昼休みは学食だった。

放課後。秋紗は病院へ行った。僕は暇つぶしに、うとうと、繁華街に足を向けた。

「いやっ！放してください！」

「てめえは無能力者だろうが！俺たち能力者の言う事ぐらい聞きやがれ！」

僕が見たのは佐天さんが裏路地に連れ去られる瞬間。

「はあ……」

あまりのクズっぷりに溜め息が出る。

「とりあえず助けてますか。

『スピード』

ギュンッ！

裏路地ライントラックへ走る、走る、走る！

『RAINBOW』

『SPEED』発動状態から敵を急襲するドロップキック。

「さあやあっ！」

背中に一撃。

気絶。

「テメエ何を……！」

と突き出して来たナイフを左足を軸に回転して避けつつ、がら空きになつたなつた延髄に、回転の勢いを乗せたまま拳を叩き付ける。最後の一人は、

『**撃拳**』
〔**ゲッケン**〕

腰を落として放つ重いパンチ、を鳩尾にねじり込んだ。
所詮、能力者と言つても雑魚は雑魚か。

「大丈夫ですか？」

「は、はい」

良かつた。変な事はされてないようだね。

「じゃ、僕はこれで」

ヒラヒラ手を振りながら振り向かず去つてゆく——予定だつたが。

「ま、待つてください！」

呼び止められてしまつた。

「あの、……ありがとうございました！――」

僕は無言で頷く。

「あの、その、えーと……」

なかなか話せないようなので先を促す。

「何か？」

「その、ゆ、優一さん、つて呼んでも良いですか！」

びっくりしたあ。そんなことか。

「構いませんよ。佐天さん」

「あ、あの、私も、る、涙子つて呼んでください！」

「分かりました。それでは、御会いできる日を楽しみに。涙子さん

「ありがとうございました！」

ふう、どうやら僕はまたフラグを立ててしまつたようだ。

『SIDE・佐天』

やつた！七城さん、じゃなかつた、優一さんと喋れた！

状況は最悪だつたけど。

「御会いできる日を楽しみに」だつて。

「やーーーーーかつこいいーーーー！」

……、でもあの動きは凄かつたよね。まるで軍人みたいな感じ。
いつさい能力使ってなかつたよね。（笑）（笑）

絶対あの人が鍛えてるよね！

腹筋割れたりして。あははっ！！

初春にメールして自慢しよう」と…

『SIDE: 優一』

家に帰った。学生服を脱いで、部屋着代わりのスウェット上下を着る。

音楽フレーヤーをつないで、洋楽のロックを流す。
秋紗はまだ帰つて来ていない。

さあ、今日僕にご飯食いたい。
さて、夜まで寝ますかね……。

四庫全書

束の間の日常③（後書き）

佐天にフラグが立ちました。

次回はいよいよ一方通行＆アイテムとの戦いです。
それでは。

死闘！（前書き）

主人公、夜の街を走る。

えー、暗部の守備隊に関してはねつ造です。

原作で、警備隊も何も居ないのはおかしいかな、と思いまして。

死闘！

夜になった。

僕は仮眠から覚め、レトルトのパスタを食べる。

秋紗は検査入院だ。今日は帰つてこない、と言つていた。

地下の倉庫へ行き、銃を整える。

Tシャツの上に、赤いロングコートを羽織り、『リベリオン』を背中に、銃をコートのホルスターに、古代兵器をコートの内側に入れる。

実際はコートの中に入るサイズではないのだけど、『斬魔刀』の効果で次元を歪め、突っ込む。

警備員アンチスキンにバレないよう、『飛空』スカイダンスで、マンションの屋上と屋上を飛び跳ねつつ、研究所へ急ぐ。

……、それにもしても、学園都市の七不思議は地味に的中してるのが多い。

口り先生とか、当麻の『幻想殺し』イマジンブレイカ-とか、妹達シスターズとか。

その都市伝説の中に、新しいものがある。

『誰も操つていないので動く糸人形』マリオネット。その糸人形に会つと、手に着けた刃物で斬り殺される』ってね。

学園都市にしては随分とオカルト的だが、僕には心当たりがあつた。『マリオネットノブラッディーマリー』魔界の下級悪魔が人形に入り込んで動き出した物。武器はナイフや、半月刀。人間界に出現する悪魔の中ではもつとも弱い悪魔。ブラッディーマリーは血を浴びた人形に下級悪魔が入り込んだもの。マリオネットよりは耐久力が強い』

と、僕の手帳には書き込まれている。僕が書いた覚えは無いのだが。悪魔が学園都市に出現している、と確定した訳ではないが、調査が必要だな。

魔術的な場所ではない学園都市にまで出現しているのならば、魔術的な場所、つまりは——イギリスや、バチカンなど、魔力が濃い場所には高等悪魔が出現してゐるかもしれない。

やつぱり、僕も便利屋でもやつて悪魔退治した方がいいかな。魔術の世界では僕の名前は超有名だからなあ、でも、アレイスターに許可もらわないといけないなあ。

めんどくせえ。

『自由に学園都市を外出できる許可』なんてもらえるか？無理っぽいけど。

おっと、考へてる間に研究所の区画に到着した。
さてと、ここに警備隊、多分暗部だろうが強いかな？

攻撃開始。

ググッ…………ドオオン！！

僕は左拳を引き、僕がいたビルの屋上の空間へと叩き付ける。ビキビキッ…………！

もちろん、地上にいた警備隊は騒ぎ始める。

「どうしたつ！何があつた！？」

「大気にビビ！？一体何の能力者だ！」

「なぜだつ？ここは研究区画だぞ！何故侵入を許した！？」

僕のいるビルが崩れ始めると同時に、僕は地上に降り立つ。

「何者だ！」

「…………」

ズバッ！

目の前にいたおっさんを『震動靈劍』^{プラスティフレード} 状態の左腕で斬り上げて沈黙させる。

その勢いのまま一回転して、空間に拳を叩き付ける。

ドゴォンッ！

『アースクエイク・ベイジョン』

『地震解放』

で、右にあつたビル群を文字通り倒壊させると、さすがは暗部、僕

の正体に気づき始めたのか、増援を呼び始めた。

「いやら、A区画守備隊！学園都市第二位の攻撃を受けている！繰り返す！学園都市第一位の攻撃を受けている！」

「あの少年は『メンバー』、『ブロック』を壊滅させた実力者だ。うかつに近づくとこの世とはやばだぞー。」

「やつは格闘戦に秀でている。狙撃を……！？」

その間違った認識が命取りだせ！

漢は『MP5SD2』を襲から出し、射撃。

「銃を持っているぞ！物陰に隠れろー。」

ちなみに、震動靈劍は、セメントぐらこなりばつをつ斬れるんだよ
ね。

スペアン！

「ビルが……縦に割れた！？」

いや違うな。しまのは明らかに『転撃』だ。転ったんだぞ？そ

「へえ……、切れ者もいるじゃん」
スパークリングティーアイジ

発泡両掌斬

六

• ۱۱۰

その切れ者は僕の攻撃をレーザーフレーイドで防いた。

消灭
破裂
斬

スパン！

「ゲーリーも！」

これは防げなかつ

「ベテラン強いぞーもつと増援を」

まだ増えるのかよ。めんどくさいな。

「消し飛べつ！」

！？

ボゴーン！

「やつたか！？」

……、はあ、びっくりした。

「残念、無傷です」

「なつ！？？」

「邪魔です」

『衝撃収束』『上段蹴り』

踏み込みながら右足で蹴りを放つ。

バキッ！

首の骨が折れる嫌な音がして、手榴弾を投げたヤツは吹っ飛んで行く。

ウザツたいほど多いんだけど。

『紅蓮』

火炎放射のように激しい炎を前方に叩き付ける。
前方の連中を黒焦げにしたあと、『イノセント・ゼロ』
この区画を抜ける。

「敵は絶対能力進化実験場の方向へ逃走！警備を強化せよ！」
速いな。さすが暗部と言つべきか。

「発見した！殺害せよ！」

お前らに殺されるほど弱くねえってのー！
ドン！ドン！

敵の射撃を避けて、壁に隠れる。

敵の居る方向へ身体を向け、左手を地面に付ける。
『デザート・ジラソーレ』
『砂丘の向日葵』

ベコオ！

そのとたん、地面が沈む。

「な、何だ！？」

「地面が沈んでるー！」

「総員退避！」

バキンツ！

前方、球状の範囲がクレーターでもできたかのよつに沈み、敵を飲み込んだ。

「クソツ、かかれつ」

後ろから敵が襲つて來た。

僕は側転して攻撃を避けると、背中の『リベリオン』を抜いた。

『HIGH TIME』

敵を空中へ打ち上げる強力な斬撃。

また、打ち上げた敵とともに自分もジャンプすることもできる。

『HELM BREAKER』

空中から急降下しつつ繰り出す一撃。いわゆる空中急降下斬り。

空中に居る敵や、極端に大きな敵に対しての有効な攻撃手段だが、

地上の敵にハイタイムを当ててから使うのも効果的。

『REBELLION KOMBO C』

左袈裟斬り 右斬り上げ 左斬り上げ 左回転袈裟斬りと続く四連続のコンボ。

どのような場面でも使えるオールマイティな技。

「だめだ、格が違すぎる」

「……消し飛べ」

『エレクトリックショット』

『荷電粒子砲』

『シャイニーランサ』

地球に降り注ぐ星の光を粒子震動させ、光の槍を降らす技。

「退避、退避——！」

終わつたか。

もう敵はいない、かな。

死闘！（後書き）

次回はアイテムとの戦闘です。
主人公VS麦野沈利との壮絶な射撃戦がある予定です。
それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1969x/>

とある少年の転生人生（アンノウンライフ）

2011年11月23日19時50分発行